

フロア参加型鼎談

〔登壇者〕 藤原 さと（一般社団法人こたえのない学校 代表理事）

〔登壇者〕 佐藤 賢一（京都産業大学生命科学部 教授／NPO 法人ハテナソン共創ラボ 代表理事
／株式会社 HackCamp 共創エバンジェリスト）

〔ファシリテーター〕 塩瀬 隆之（京都大学総合博物館 准教授）



塩瀬 ご紹介、ありがとうございます。本日は、Slido という Web サービスを使って皆さまとやりとりをしたいと思います。「フロア参加型鼎談」と書いてありますが、このままでは会場の皆さまは参加できないではないですか。今回、このステージ上にも席をご用意しているので、もし、どなたか座りたい方がいらっしゃれば、ここに座っていただいても結構ですが、なかなか座る勇気は出ないですよ。学校で言う「問うてもいいぞ」というのは、実際に座ることがないことを分かっている聞いている問いかけに近いかもしれません。教室で授業が終わったときや、会議で「何か意見のある方はいらっしゃいますか」と言うのも、これと同じ状態で「本当に座っていいですよ」と言いながらも、実際のところ座る勇気はでないですよ。最初に藤原さんがおっしゃった、「学校はちゃんと問える場所になっていますか」という問いかけは、まさにこの椅子を通じた問いかけに象徴されるのではないかと思いますので、できれば、今日は皆さまに本当に参加していただきたいで

す。

ただ、ここにいる全員がこのステージ上の椅子に座られるとそれはそれで困りますので、この Web サービス Slido を使いたいと思います。皆さまのお手元にスマートフォンかパソコンをお持ちでしたら、一番後ろからでもこの QR コードが映ることは確認済みです。「私の携帯にはカメラが付いていない」と言う方がいらっしゃるかもしれません。その場合は、Safari か Chrome などの Web ブラウザで slido.com というページにアクセスしていただけると、そこにミーティング番号を入れるところがあり、「3385659」を入力すればアクセスできます。さらに「私は携帯を持っていません」という場合は、先ほど、佐藤先生がやっていただいたのと同様に、皆さん、隣の人がチームとしていらっしゃると思いますので、その方たちに「僕の代わりに書いてくれ」と言ってくだされれば、必ず書き込めます。

ここにどのように入力すれば良いか、よく分からない方もいらっしゃると思います。名前は匿名のままで結構です。モードが変えられます。切り替えると投票モードに変わりますので、実際にお手元で投票してみてください。これから始まる鼎談について期待度を次の選択肢から選ぶとすれば、どちらに当てはまりますか。「午前中の二人の特別講演が面白かったので、これ以上聴く必要はない」あるいは「午前中の二人

の特別講演が面白かったので、質問したいことだらけなので、早く始めてほしい。いい加減に始めろ」どちらでも結構ですので入力してみてください。

いいですね。すごいですね。既に 90 人以上の意思表示がなされました。これ以上、聴く必要がないという方が 6 % もいらっしゃいます。あちらから退出できますので、お願いします。ここで大事なことは、匿名だから答えられるのです。今、180 名の方から意思表示していただきました。このように、ときおり投票モードに入ります。ちなみに、Slido は無料のサービスなので、コロナ禍でも、中高などでいろいろ講演させていただく際に、使っていました。その後、皆さんの学校でご活用していただいています。

もう一つ、今、皆さんのお手元からも投げかけられた質問が確認していただけるかと思いますが、右に「いいね」マークのボタンがあると思います。ほかの人の質問を見て「それ、俺も聞きたかったんだよ」というものがあれば、この「いいね」マークを押していただけると右のほうへカウントされて、人気順で並び替えができます。皆さんのお手元に 15 個の質問がありますので、ざっと見ていただいて「これいいな」「これ、私も聞きたいな」と思うものがありましたら「いいね」ボタンを押していただけますでしょうか。入力していただければと思います。ありがとうございます。これを人気順に表示を並べ替えますと、たとえば多い順に並び替えができます。これは、皆さまのお手元でやってください。これは、私の手元でやったものです。一番たくさん押されているものは「良い問いをつくる前段として、そもそも解きたい問いがある」「生徒一人一人が人生からやってくる問いを受け取れるようになるためには、どんな工夫が必要でしょうか」これは、最後にすれば良いのではないかというものですよね。しかし、これが聞きたいことですよ。

これは 27 もありますね。すごいですね。藤原さん、これをお願いします。30 秒でご回答を頂けますか。次のやつは佐藤さん、お願いします。引き続き、30 秒をお願いします。パスでもいいです。

藤原 「人生からやってくる問いを受け取れるようにするためには、どんな工夫が必要でしょうか」ですね。これは、実際には大変難しいですよ。高校 1 年生の娘がいるんですけども、私学で総合型選抜を目指すコースに入っています。そうすると、プロジェクトやボランティアでとても忙しいんです。先生たちそれぞれが一生懸命にプロジェクトを出すわけです。「今日、締め切り」「明日、締め切り」と。娘がクラスの子たちにサーベイしたら睡眠不足の子がかなり多く。部活などほかの要因もあると思いますが体調を崩している子たちもいて。

これは極端なケースかもしれませんが、そこまで追い込まないほうがいいように思います。これは、仕事柄他の学校でも起きているようですが、チームを組んだとしても、皆が忙しくて回らないとき、フリーライディングが起きて、結果真面目な子が尻ぬぐいをすることがよくあります。私もサラリーマンだったので分かりますが、悪い意味で企業と似てしまっています。提出期限が決まっているので、とりあえず、やっつけでインタビューをして、まとめて、プレゼンで出そうとなります。そのようにならないためには、一定の時間が必要かなと思っています。子どもたちの時間をマネジメントすることは、今の課題かなと思っています。

塩瀬 ありがとうございます。前半、もう少し短くて大丈夫です。問い過ぎだと、探究し過ぎではないかということですね、少しやり過ぎだということですね。

次に行きましょうか。次は佐藤さんに、引き続き質問です。「宿題や部活動行事で高校生が

あまり忙し過ぎて、やらされ探究だったり、そもそもそれは探究ではないか。調べ学習や問いの立て方が難しい、ハードルが高いと感じる生徒が多いです。どのようなコーチが必要でしょうか」です。

佐藤 ありがとうございます。一つ一つが難しいですね。

塩瀬 全部、難しいですね。

佐藤 そうですね、どのようなコーチが必要でしょうか。必要条件が明言できるほど、私も経験値がないのですが、感謝とご褒美のバランスについて考えることが重要ではないかと、少し抽象的ですが、今、一生懸命考えて、思いました。その取り組みが自分にとってどのようなメリットがあるのか、どのような楽しみがあるのかのストーリーができないと、宿題みたいな、オーソドックスな、昔からあることもそうなんです、言われたからやるを超えて、自分のためにやっているという考えの下で取り組めるように働きかけるのが、われわれ教師という立場のできることだと思います。われわれが学ぶ立場になっても「これは何のためにやっているんだっけ、宿題だから」ということを超えたものがないことには、続けるモチベーションは維持できないと思いますので、自分が同じものを与えられたときのロールプレイは、教師としては難しいスキルかもしれませんが、自分に置き換えて、何が足りていないのかと考えることで、生徒一人一人に最適化したものが見つかっていくのではないのでしょうか。ただ、時間的な制約もあるし、一人一人の先生方に使える時間も限られていると思うので、一人で考えないことを次の視点として申しあげたいと思います。私からは以上です。

塩瀬 はい、ありがとうございます。質問が重

いから、回答も重いですね。もう少しライトにしていきたいので、今からしばらくは重い質問は禁止です。軽い質問のみ送ってください。今からは、1行以内に収まる短い、軽い質問のみOKにします。今から軽い質問のみですので、もっと短くしてください。

「良い問いの基準を生徒さんに教えるためには」。では、藤原さん、お願いします。最近の順で上から4つ目です。2つ目、「探究活動の評価をどのようにすれば良いでしょうか」。回答は必ずしも短くなくてもいいです。



藤原 どれでしょうか。最近の、4つ目ですか。

塩瀬 どんどん先に行っていますから、その4つ目で。

藤原 ごめんなさい、もう一度、お願いします。

塩瀬 「探究は疲れませんか」これで行きましょう。

藤原 「探究は疲れませんか」疲れだと思います。

塩瀬 次に行きましょう。次は佐藤さんです。「これはすごい問いだと思ったものを紹介してください」

佐藤 「これはすごい問いだと思ったもの」で

すか。「ひょっとしたら太陽ではなくて地球が動いているのではないか」のような問いです。

塩瀬 いいですね。

佐藤 すごいです。よく思いついたなと思いました。

塩瀬 それでは、次に藤原さんです。「英語や数学の問いづくりは難しくないですか」

藤原 英語や数学の取り組みですか。

塩瀬 問いづくりです。

藤原 問いづくりですか。どうでしょうか、英語だったら普通に英語で問いをつくってみても面白いと思います。いずれにしても、楽しいことを考えれば良いと思います。数学でも、私は文系なので、リアルな事柄と数学と組み合わせたような問いがあれば、面白いかなと思います。

塩瀬 いいですね、その次の「探究をやるときの心構えとかノリとかどんな感じでしょうか」と合わせてですが、先ほどの英語の問いづくり、「英語を対象化したような問いづくりに必死になり過ぎてつくると嫌になるのではないか」と思うので、先ほどの、英語で問えば良いのではないですかというのは、すごく良いノリだと思います。数学も、数学の問いをつくろうと必死に思うから嫌になるのですよね。数学という機能で使うか、でも良いような気がします。まずは、英語とか数学に関わる問いを多くぶつけるのが大事な気がしますので、皆さん、良い問いをつくろうとし過ぎなのではないでしょうか。今日のシンポジウム全体の問いがそもそも悪いですよね。「どうすれば良い問いをデザインできるか」これは、私は絶対に付けないタイ

トルです。これを皆さんで考えましょう。

次に、佐藤さんに聞きたいのは、「やる気のない生徒はどうしたらいいですか」

佐藤 やる気のない生徒ですか。やる気のない生徒をどうしますかということですか。

塩瀬 そうですね、「どうしたらいいですか」と書いてあります。

佐藤 やる気があるとかないとかはあまり関係なく、一緒に取り組んでみるようにしています。今日の午前中も「今からワークします」と言ったときに、皆さんにやる気があるかどうかは、僕は確認しませんでした。そのような感じでは、まず取り組んでみて、どうだったかという振り返りの繰り返しで、やる気はあってもなくてもいいと思っています。

塩瀬 そうですね。そもそも、皆さんはやる気を何で判断していますかと言われたときに「明日までに仮説を出してこい」と言ったときに、仮説が出てこない、「こいつはやる気がない」と勝手に決めていますが、すごく考えているかもしれませんよね。すごく考えた上で絞りきれないかもしれないのに、翌日、提出していない、「こいつはやる気がないやつだ」と決めつけていないですかということも含めて、本当にやる気が要るのですかということですよ。

佐藤 そうですね。やった、やらなかったかということは、後で振り返ることができますが、やる気があるのか、ないかというのは、見ても分からないし、聞いても分かりません。「私、やる気がないんです」というのは、ツンデレかもしれませんし、隠しているかもしれません。

塩瀬 次に、藤原さんです。「問いであふれ返って、收拾がつかなくなった教室をどうすれば

いいでしょうか」これは、素敵ですよ。

藤原 問いであふれてしまって、收拾がつかなくなったのですか。

塩瀬 教室をどうすればいいですか。

藤原 とてもいいではないですか。

塩瀬 皆、出なくて困っているのに、なぜ悩むのですかと言いたいですよね。これは、何でしょう、先ほど、佐藤さんが「別に全部、拾わなくてもいいのではないかと、お話しされましたよね。

佐藤 ある意味、そうですし、背中合わせに思うのは、出てきた問いを全部、壁に貼っておけばいいと思います。とにかく收拾つかない状態を見るのはめったにないことなので、それを楽しみたいという気もします。

塩瀬 部屋じゅうに貼って、ドアが開かなくなったら考えればいいですが、そこまでは貼っても大丈夫ですよ。

では、次に行きましょうか。「先生は生徒がつくった問いと、どんな立ち位置や関係性で向き合うのですか」

藤原 少し真面目な話をすると、探究もそうですが、先生が探究しているから学校で探究ができます。先生が漢字を知っているから漢字を教えることと、あまり変わらないと思っています。先生が問いをつくることを楽しんでいるから、問いづくりができるのではないのでしょうか。しかし、問題となるケースは、先生が問いを作ったことがないこと。だったら、生徒と同じフラットな場所に立って、一緒に探究をしよう、一緒に問いづくりをしようというマインドセットに変わっていくことが結構大事なかなと思っています。

ます。

塩瀬 ありがとうございます。

次に『『楽しめる問いにしてみよう』と言っても生徒はできません、どうしましょう』という問いです。その問いが楽しくないのではないかと思います。

次に行きます。「探究と授業のどちらが大事ですか」これは佐藤先生、お願いします。

佐藤 「楽しめる問いにしてみよう」と言っている先生が、ちょっとうざい感じがします。ということで、私も答えません。「先生、つくってみよう」と言うと思います。どうしようということですよ。

塩瀬 そうですよ。

佐藤 これは先生の立場ですか。そのような意味ですと、先生が自分で「こういうのが面白い問いなんだよ」と言ってしまうのは、QFTの流れでいうと、ぶち壊しになってしまいます。ただ、必ずしも、QFTの問いの事例を言わないほうが良い話は、ユニバーサルにそうだとやっているわけではありませんが、問いが出てきたことに対して、ありがとうという気持ちを伝えることがベースになって、生徒と、もしくは生徒同士で関係がつかれるように促していけると、だんだん発想が豊かになって、人の発想をいい意味でパクったり、パクられたりという関係がクラスに生まれて、対面で20人、30人、40人で集まって、しかも先生という経験豊富な誰かがいるという、とても豊かな、得がたい場所がよりパワーを発揮するイメージを持っています。だから、どうしようというのも問いだと思いますが、一緒に考えていくチャンスではないかと思います。

塩瀬 今、出てきた中に「良い問いは、結局、

何ですか」という問いがあったので、投票モードにして、皆さんのお話を聞いてから議論に入りたいと思います。午前中から聞いてこられた方も、普段から思っていることでもいいので、良い問いを別の言葉に置き換えるとしたら、皆さんはどんな言葉を考えますかというのを入力してもらえますか。

いいですね。「楽しめる問い」「生徒がわくわくする問い」。

これは複数、書けますので、思いついたらどんどん書いてみてください。かつ、これは Word cloud という方法なので、皆さんが書いた文字の全体が一望できるように出てきますし、同じ言葉が重なるとその分、一つ一つの文字が大きく表示されるようになっています。

例えば「わくわく」と書いてくださった方が複数いると、Word cloud でその文字が大きくなります。これは Slido で勝手に集めて集計してくれているので、皆さんにも楽しんでいただけるのではないのでしょうか。ここから投票モードに変わります。1 個入力すると、前の人のものが見られるようになります。

複数書けますので、1 個書いた後に、また思いついたら書き足していただいて結構です。他の人のものをご覧いただいて、私もそう思うと思ったら、もう 1 回、同じ言葉を入れていただければと思います。「深い問い」「対話が弾む問い」ですね。

今、入り損ねている人がいたら、QR コードからまた改めて入れますので、今からでもお入りいただけたらと思います。

今は、きりがよく 111 入りましたので、これを踏まえて、午前中に佐藤先生がやってくださったグルーピングがありますよね。皆で一緒に鼎談しましょうとあって、3 人組、4 人組をつくりました。午前中と違うところに座っていて「この人は誰だろう」と思っている人が隣にいるかもしれませんけれども、もう 1 回、目配せして、この 3 人だろうかという人たちで目を合

わせてみてください。どうぞお願いします。午前中と違う人がいるなと思って、自然に受け入れてあげてください。多分、一人だと寂しいと思うので、現状、2 人、3 人、4 人で集まってください。その方々で、今、画面に出ている、良い問いをほかの言葉に置き換えるとしたら、こんな言葉になっているものをどう考えたか、今から 5 分用意しますので、ここにたくさんちらばっている言葉を「これはいいな」「これは違うのではないか」を 3 人で話をしてみてください。

<話し合い>

塩瀬 では、話を止めていただきたいと思います。ありがとうございます。

1 回、投票モードを収めて、次の問いをついている間に、登壇者お二人に聞きたいと思います。今、私が声をかけたタイミングは、最初は 5 分と言いましたけれども、4 分 30 秒くらいで声かけをしました。それはなぜかという、皆さんの声のボリュームが下がったところで声かけをしました。200 人、300 人くらいでしゃべってもらっているときの私の介入のタイミングは、声のボリュームで決めています。大き過ぎると、にぎやかになって、多分、違う話をし始めているだろうなというのがありますし、しーんとなってくると、それはそれで話することがないだろうというので、落ちてくるくらいを声かけのタイミングにしています。5 分と言ったからといって、5 分ですることはないだろうということが大事です。皆さまの温まり具合を常に一定に保つことを目指して、ファシリテーションをしています。

この間に、登壇いただいているお二人にもご質問をさせていただきます。「良い問いとは」を言い換えるとしたら、皆さんからたくさん出てきて、それぞれのグループで協議をしていただいたかと思いますが、お二人は「良い問いとは」について、どのようにお考えになったかをお伺いしたいのですが、それでは、佐藤さんか

らお願いします。

佐藤 はい、ありがとうございます。このフォーラムのタイトルにもなっているので、かなり前から良い問いについて考えていました。私は良い問いという言葉を見たり聞いたりすると、どうしても悪い問いも同時に考えたくになります。そこから逃れられないです。どのようなものが悪い問いだろうと考えるのがすごく楽しかったので、いろいろ考えた結果、問いが悪いかどうか、結局、裏返して、良いかどうかというのは、問いそのものではなくて、その問いをどのような文脈で、何のために使うのかで、悪かったり良かったりする思惑、要するに問いを立てる人、立てられる人の関係性があるのではないかと思っています。「良い問いとは」と言われても、少し難しい、一概に言うことができないという結論に立ちました。

非常に前向きで、学びのために役立てたいというのが、リサーチ・クエスチョンとか探究のための問いの言い方にあるとすれば、多分、それは良い問いを求めているという合意が取られやすいと思う一方で、問いの中には、誰かを問い詰めるためにつくる問いもあれば、誰かを罠にはめるために使われる問いもあると思います。その問いというのは、必ずしも問い自体が良いとか悪いのではなくて、どんな目的で、誰がどういう狙いで使うかというところに、善悪だったり、法律違反だったり、いろいろな観点が取りうるものだと考えると、良い問い、悪い問いについて考えることは有意義である一方で、このようなものだということがなかなか言いにくい、難しい問いだというのが私の印象です。

塩瀬 はい、ありがとうございます。ではさっ

藤原 P 4 C (Philosophy for Children) とい

う哲学対話の手法があります。そこで言われていることが、子どもたちのファシリテーターである大人が、どんなにばかげた問いと思っても、まずそれを受け止めてあげて、その問いを育ててあげようということです。例えば、ある男の子が「なんで、おなか空いているんだろう」と言ったとして、一見馬鹿げた問いだとしてそれを破棄しないことです。この問い、深く深く考えたら、科学的にも哲学的にも非常に面白い問いになるではないですか。「なぜ、おばけは怖いのか？」など、なんでもいいです。そのようにして、どのような問いであっても、かなり面白い問いに変えていけると思っていたいなと思っています。

先ほど、文脈という話も出ましたが、その場の教室にいる子の、そこに置かれているストーリーや文脈を読み取った上で問いを育てていく感じですね。私は、先ほど、自分は問いを立てるのが得意ではないと言いましたが、最近、遺伝子がどのくらい影響するのかという本が出ていて、私も読んでみました。私が、問いが苦手という遺伝子を持っているかは知りませんが、少なくとも私は小さい頃から問いを発したりすることをエンカレッジされるような環境にはいなかったことが関係しているのではないかと、とも思うんです。学校では問う前にずっと答えさせられてきました。それから、変な問いを出したら恥ずかしい気分になったり、怒られるのではないかという感覚をずっと持っていたように思います。そういうものがない学校があってもいいのではないかと考えています。

塩瀬 ありがとうございます。そこから、皆さん、お手元の台本を見ていただいて、今日のテーマをもう1回、見ていただきましょう。「どうすれば良い問いをデザインできるか」と書いてありますが、どうしても良いか悪いかの品評が常にちらついてしまっているのはなぜかを、

皆さんのお手元を投票モードに変えたいと思います。

ここに集まっている方は先生が多いと仮定して、教師、あるいは教育委員会の方でも結構ですが、「良い問いを尋ねたくなるのはなぜだと思いますか」。尋ねて、つい欲してしまうのはなぜだと思いますか、短めの文章で結構なので、これではないかと思うところを書いてください。

今、書き込んでいただいたものを読んでみますね。「教師が失敗したくない」「時間が限られている」「評価の必要性を感じていない」「評価型学習の弊害ではないか」「探究の成果ではないか」「教師が受けてきた教育経験である」「この問いで生徒が育つのかなと思う」「評価するため」「不安だから」「何か良い探究をしなければというステレオタイプ」「自分都合」「成績を付けるため」「総合的評価」「答えのある学びに慣れているから」「面白いから」「自信がないから」「正解を用意している」「評価を付けないといけないから」「生徒や学生の理解度を把握するから」「効率良く進めたいから」「評価をしないといけないから」「生徒から評価されたいから」「効率良い問いを立てることが正解だと思っているから」「教育者ぶってしまうから」「思考の過程を見るから」「教師だから」「評価しやすいように」「自分が良い人間だと勘違いしているから」「他人のつくった問いであれば自分が評価されないから」「教育は正解を求められているから」「評価しないといけないから」「成績を付けなければいけないから」「良い問いだと思っているから」「正解を当てにいくことに慣れているから」「答えを出したい生き物だから」「聞いている人の前ではいい格好をしたいから」「良い問いが少ないから」「評価が必要とされているから」「自分が足りないから問いを育てている時間的余裕がありません」「教師自身の成果の検証」「評価をしているから」多いですね。頑張って読んだので、あとは各自で読

んでおいてください。107 くらいありますから、皆さん、すごく書いておられますね。

皆さんが多く書いてある言葉に「評価」という言葉があります。そしてまた先生としては答えを教えたいというのがちらついている可能性もあります。皆さんがイメージするとおりの教師像がちらついて、どれか一つに考えをしばるのが難しいと思います。いろいろな学校で先生方と研修会で一緒するときに、「そもそも、なぜ評価したいのか」ということ自体を先生方にまず最初に考えていただく時間を設けると「探究も評価をしないと生徒はやらないから」という意見が結構多く出てきます。「脅しのためだけに評価をやるのですか。」もちろん、「より良くするために評価をする」という意見もあります。「探究をより良くするための評価なら良いのかどうか」、本当に探究に評価が必要なのかと考えたときに、ただ点数をつけることに意味があるのではなく、生徒が次に出す問いが変わることに意味があるはずですよ。探究の評価について考えている先生方とお話したときには、「良い問い」というのが、ただ先生に褒められるような良さを求めているのであれば、それに取り組んでいる以上は本当に皆さんが求めている問いには絶対に近付かないだろうと思います。つまり、ここで言う良いというのは先生に肯定的に評価されることを前提としていますよね。問いは、もっと内なるものだと思うので、良いというものが、自分ではない第三者から指さしてもらうものが良いと言い続けている限りは、多分、先生方が期待している問いには近付かないのではないかと思います。一番簡単に言うなら、「先生に褒められたら負け」というようにしたいです。先生に褒められると、それは先生の手のひらの上にいることなので、いかに先生に褒められないところまで生徒が考え続けるかが大事な気がしますが、先生としては教室の中に自分の知らないことを置いておきたくないと思ってしまうと

思います。

先ほどの質問の中にありました「探究と授業は、どちらか大事か」ということですが、探究が学校の中にあることの意義は、先生の手のひらの外側にあると思うことが教室の中に現れた。そのことが一番大事だと思うので、探究が皆さまの学校の中に入ったことは、先生が知らないことが学校の中にあってもいいという一番のメッセージなはずで、ぜひ、それを受け止めてほしいです。そのときに、どちらが大事かと言いつつ、探究か授業かどちらかを排除することになります。探究に力を入れている学校があってもいいし、総合的な探究の時間を補習にしている学校も耳にします。でも、そうではないちゃんとした探究をしたいのであれば、「良い」というのを一回外してもらえれば期待しているような探究に向き合えるという気がしています。

今、皆さんがここに投げかけてくださっている問いかけの数が100個になりました。皆さんが投げかけていただいたものが、既に100です。素晴らしいですね。素晴らしいですが、ここから登壇者のお二人で答えていかなければいけないです。ここから、また答えモードに入って、皆さんで考えることを繰り返したいと思います。

では、これをもう1回、人気順にしたいと思います。皆さん、今から1分間ご用意しますので、お手元の100個の質問を見ていただいて、どんどん「いいね」を付けてください。もう1回「いいね」順を採用したいと思います。Q&Aのところで、ざっと見ていただいて。片っ端から「いいね」を押して行ってください。

気付いたやつをご覧いただいてもいいですか。「探究で地域とつながる必要はありますか」最近では、探究と地域学習がセットになっていて、探究すると、絶対に地域をやらなければいけないという先入観があるような気がします。佐藤さんのところには、そんな相談は来ないですか。地域の探究はどうすればいいですか、商店街の

活性化とかしか思い付かないですけども、などとそんな相談はこないですか。

佐藤 ないです。

塩瀬 ないですか。そんなものは要らないですか。

さとさん、今、この時点で何か気になるものがあれば、捕まえて答えましょうか。「探究は本当に教員が必要ですか」探究に教員が要るかということですか。必要だと思います。

佐藤 塩瀬先生がおっしゃるように、探究学習というものがわれわれの学び場に入ってきたのは、一種の仮説検証ですよね。私たちが学んできた履歴の中に探究学習の授業はなかったので、新しいものに対する期待感以上に、分からないので怖いとか、できれば触れたくないというのは、生物本能的にある反応だと思います。そこを超えて今の学びは、最先端にいる学び手たちというのは、新しい仮説の下での学びを実践しているところに私たちがどのくらいフラットに対応できるかという、そのような問いかけの下にいると思います。やる気が出なくてもやってみることがまず大事で、その上で実践を交わし合うのがこういう場なのかなと思っています。あるいは、来年以降の答えなのかなと思います。

塩瀬 そういう意味で言うと、朝の特別講演でさとさんがおっしゃられていた「不安から始まる」という点で言うと、今、皆さんの教室で起きている探究は既にできているのではないかと、不安から始まっています。しかし、それを「明日までにテーマを決めてこい」と言ったときに、それを解消しようとするから、全員にテーマを出させたことにしてしまうところが、不安から逃れようとしている展開です。せっかくVUCAと言っているのですから、不安と向き合うこ

とが大事です。

さとさん、どうですか。

藤原 私ですか。時代の節目とか潮目という言い方を言い過ぎるのはどうかと思いますが、それこそChatGPTも含めて、1つの潮目のなものがあるのではないかと考えています。100年後から今の時代を振り返ると、今の時代を節目だったなあ、と振り返るのではないかなと思うこともあります。今、私が問題視しているのは、近い将来を予測して、将来の準備をすることが習慣になっていることです。例えば、これからサッカーがはやいそうだから、サッカーのスタジアムを使って、ここにプロモーションかけると儲かりそうだ、とか。それと似たような感覚で、これからはデータサイエンティストが必要だ、グローバル人材になればならない、これからはプレゼンテーション能力がなければいけない、といって闇雲に準備ばかりする。それこそオブセッションですよ。恐怖感から教育においてもコンテンツのオーバーロードが起きています。

今、VUCAというか、将来が見えにくいような気がすると思うのですが、分からないものを分からないままにしておいてもいいのではないのでしょうか。将来が分からないということを前提に、自分は何が好きで、どのような人で、どのように社会に関わり生きたいのかを問うていくほうが近道になるのではないかと考えます。こうした文脈の中に、探究というものが置かれているのかなという理解をしています。

塩瀬 はい、ありがとうございます。評価と一緒にですが、何のためにやるのか、役に立つのかと言わないとやってはいけない強迫観念というのは、先生方も経験があるかと思います。そもそも、やっていること全てが本当に役に立つのかという話もあります。それを信じていないのに、生徒の前で、役に立つらしいという噂だ

けでやっていること自体も不誠実ではないかと思います。先生たち自身が本当に探究の授業を大事だと思っていたら、やればいいのかと思いますが、噂で、やらないといけないという顔で生徒の前に立ったときは、すぐ分かりますよね。本人はそれを大事だとは思っていないが、やらないといけないという噂でやっている先生はすぐに分かります。そういう意味で言うと、先生方自身が探究を楽しんでもらうことが、僕たちからの一番のメッセージで、楽しめない人から楽しむ探究授業ができるかということ、難しいのではないかと思います。本当は、何かのために役立つから学ぶということからの解放ができればいいと思い、探究というのが学習指導要領に入ったはずですが、そこが声を大きくして言いきれていないような気がします。

この間、京都の夜間中学にお邪魔したときに、80歳の女性の方と、モロッコの方と、ネパールの方と、5～6時間に昼間の不登校の生徒と重なった合同授業を見学させていただきました。たとえば、80歳の方にとって中学校の国語の勉強をするときに「将来、役に立つかも知れないから、今のうちに勉強しておきなさい」というのは通用しないですよ。その方が学んでいる横で実際に昼間の不登校経験の生徒が学ぶような場面を共有できるというのは、すごく素晴らしいことだと思いました。教科にせよ探究にせよ、それが将来のためにという、今を無視した置き方自体に子どもたちは不満を伝えたのだと思います。今、自分が本当に楽しいと思っていること、不思議と思っていることに向き合う時間を、少しでもいいから確保してほしいからこそ探究授業があるのだと思いますが、そこすら今を大切にせずに追い込まれるわけです。役に立つらしいとか、AO入試に使えるらしいとか、そういった外的な理由から解放した時間を学校の中で持ってもらえばいいなと思いました。そこは、先生が信じていただくことが大事かなという気がします。

今、「いいね」をいっぱい押していただいたので、そこから、またご登壇メンバー二人に聞きたいと思います。「いいね」が10付いている問いかけの中から、お二人に答えてもらいたいなと思います。「総合的探究学習の時間に対して、否定的な意見や課題と思われる部分があれば教えてください」「問いには必ず答えが必要なのではないでしょうか」「総合型選抜のために探究する子どもたちにはどうすればいいのでしょうか」「問うていい雰囲気というのは、今の学校にはできているのでしょうか」。4つありますね。これはいいね11個になりましたので、外してください。この3つの中から、どれか答えたいやつがあったら、お願いします。

佐藤 「問いには必ず答えが必要なのではないか」ということですが、答えを見つけることが楽しみの1つだと思います。問うというのは、答えを見つけないという、その源泉だと思います。必要というニュアンスが「私が用意していなければいけませんか」というニュアンスだとすると、必ずしもそうではないと思います。探究のための問いというのは、尋ねる人が答えを知っていないのが前提であるのは、皆さん、当然、了解されていると思いますが、尋ねられる側が先生の立場の人であったり、専門家の方だった場合にも、必ずしもその人たちが答えを知っているとは限らないものも問いとして使っていけると思うので「一緒に探していきましょう」ということも含めて、答えがあることを前提に取り組める問いが、多分、適切な、ふさわしい問いなのかなと思いました。

私からは、以上です。

塩瀬 そうですね。必ず必要なのかという点でいうと、必ずではないが、逆に答えがある問いをしてはいけないのかという、別の強迫観念に駆られている先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。実は、先生は知っているけれども、

言うてはいけないと思って答えを言ってしまうようなことを我慢している先生がいたりしますが、知っているなら言えればいい気がします。問題は何かというと、答えが1個ではないはずなので、それが複数持てる環境が大事だと思います。

特に科学なんかは、答えが1個定まるものと世間的には勘違いされていますが、科学の暫定性といって、現時点で科学者コミュニティはこれを1個の答えですと仮置きするのが、科学の世界での申し合わせ事項のようなものです。恐竜などは、学説がどんどん変わります。僕らが昔、習ったときの恐竜は、頭の上に鼻が付いて、湖から鼻を出していたと書いてありましたが、化石の向きが逆だったというのが後々分かりました。ブロントサウルスやスーパーサウルスなど、名前がなくなったり、復活したり、いろいろです。恐竜の模型や本を100個、並べるとその変遷や違いが分かります。科学も、途中でいろいろと変わるわけです。今はこれを答えにしておこうということだから、そういう変化することも含めて、探究の時間は答えの呪縛、答えないといけない呪縛から解放する時間に使ってください。

次に、さとさん、いきましょうか。問うていい雰囲気は今の学校にはできているのでしょうか。ここは、どうですか。

藤原 問うていい雰囲気ですか。学校によると思います。今、インクルーシブ教育のプロジェクトをやっていると言いましたが、そこで私たちがミッションに挙げているのが、「全ての子どもたちが子どもたちの中で育つ世界を」です。そのミッションをベースにした授業を、ある東京の私立学校が生物基礎などを合わせて50時間くらいつくってくれました。私は、そこの伴走をしていて2年目に入ります。この間、高校生から時間が欲しいと言われまして、話を聞いたのですが、そのときに私たちのミッションそ

のものに対する問いがダイレクトに返ってきました。「共に育つの『共に』というのは、どういう意味ですか」と。それは面白いですよ！『共に』と言った場合、障害者の子と同じ空間に生きていたら、一緒に生きていることではないですか」と聞くんです。つまり、そもそも同じ物理空間にいるのになぜわざわざ「共に」なんて言うのかと。大人が考えたミッションそのものを問うので、失礼だと怒る大人もいるかもしれませんが、非常に本質的です。もう一つの問いは「ほかのメンターからは、どんどんインタビューしに行けばいいと言われましたが、どう思いますか」と言われて、これもいい質問だな、と思いました。つまり、大人が「インタビューしろ」と言っているけれど、それはおかしくないか、という批判的な問いです。「人に聞きに行く前に、みんなで対話したほうがいい」と私は返しました。

この学校は、対話の習慣のある学校です。学校に問う力を育てる時間の必要性を同時に思い知らされた経験です。

塩瀬 ありがとうございます。「いいね」がいっぱい付いている問いかけで、上の位置にあるものは既にクリアしましたが、次に挙げた「一問一答ではなくて3名の先生の対話が見たい」という、3人で話せという素直な試みがまいりましたので、3人で鼎談しましょうか。例えば、大学における探究のあり方について、お考えをお聞かせください。賢一さんから。

佐藤 大学における探究のあり方ですね。私がいる生命科学部は、その名前のおり生物について掘り下げるという学問を学ぶ場所です。ほかの自然科学に限らず、科学的なアプローチする学問に共通だと思って私が取り組んでいるのが、リサーチ・クエスションの立て方がすごく大事で、リサーチ・クエスションというのは、「まだ明らかになっていないこと」とシンプル

に表現できますが、まだ分かっていないことであると同時に、これまでの何がしかの研究の積み重ねが問いに集約されたものだという状況もすごく大事だと思っています。

だから、思い付いたことが問いとして浮かび上がって、それが言葉として出てきて、それを書き留めたことがシンプルな問いの作り方だとすると、自分の体の中から出てきた問いや、誰かの口から出てきた問いを、今、言ったような研究のための問いにブラッシュアップしていくところがすごく大事です。先ほど「答えることが前提として重要でしょうか」という趣旨の質問がありましたけれども、とにかく問いを掘り下げて、掘り下げて、吟味・検討していくという、問いを見直していくことです。何が自分にとって深掘りのしがいのある問いなのかを考えるのが、私たちが日々取り組んでいる大学というよりも、サイエンスを前に進めることに少しでも貢献するための営みではないかと思っています。

塩瀬 さとさんは、どうですか、大学における探究のあり方だけではなくて、これは企業における探究のあり方でも、さとさんが答えやすいほうでいいです。

藤原 分かりました。なんとなく大学と思って、今、考えていました。私は日本の大学を4年間通っていて、大学院がアメリカでした。アメリカの大学院にいたときには、非常にオーガナイズされたカリキュラムで、初めのセメスターで学士の4年分くらい学んだ気分になりました。獲得した知識量もやっぱりアメリカってすごいな、と。しかし、私は大学を卒業して30年くらい経ちますが、大変驚いていることがあります。それは、アメリカでの勉強よりも自分が日本の大学の学士のときのゼミでやっていた問いのほうが、今も脈々と生きていることなんです。先日卒業した大学から寄稿を依頼されて、

学生時代についてのエッセイを書いていて思いました。私、大学のときに教授に「民主主義がいいと思えない」と問い、それが「正義は何なのか」という卒論のテーマとなりました。そして今、私は学校教育の中で何をやりたいかといったら、正義や公正なのです。20歳前後というのは、とても大事な時期ではないかと思っています。一生の問いを見つける可能性が結構高いと思っています。

大学は、そういう問いに出会えるゼミや先生がいるところになってほしいと思います。

塩瀬 ありがとうございます。賢一さん、もし言いたいことを追加されたいのであれば、お願いします。

佐藤 今の話を伺って、肌身離さず持ち続いていた問いが見つかるかどうか、大学に限る必要はないかもしれませんが、20歳前後の、感受性や方向性にポテンシャルのある年代のときに捕まえられるか、僕も探究の狙いとしてすごくヒットします。

塩瀬 いいですね。次の質問にある「探究は何かとお考えですか」につなげようと思っていたところです。幾つかの大学からFD研修に呼んでいただく機会がありましたが、呼んでいただく理由の1つが「高校で探究の授業が始まっているので、大学ではその生徒をどう受け止めればいいですか」というのが先生方の問いかけになっています。そのテーマで先生向けの話をしに行ったときに、今まで大学は、本来は「研究を通じて、まさに探究をする場所」だと思っていましたので何を今さら焦る必要があるのか。その探究が高校で実施されることになったとすると、喜ぶどころか大学で教えることがなくなってしまうのではないかという恐れがあるようです。大学の先生たちが、そんな高校時代に探究をしっかりとおさめてきた学生たちに

なにか教えられることがあるのだろうかという恐れようです。京都で、探究で著名な学校の運営委員を長くさせていただいていましたが、その生徒さんがうちの大学に来てくれたときに「京大に来たけれども、大したことがない。探究を生かすどころか、単に教わるだけの授業が結構多いですね」と言っていたことがありました。

他方で、運営委員会で苦言を呈さざるを得なかったのは、また別の学生に出会ったときに、「僕は実はその高校出身で、探究を習ってきました」と耳にしました。生徒に「探究を習う」と言われたら、それは探究指導としては負けも同じだろうと思ってしまいました。それは、探究ではないですよね。教わってしまっていますよね。本当に探究してほしいと思ったのなら、先ほど登壇のお二人もおっしゃったように、大学生とか大学院生なら一生、持ち続けたいような問いに出会ってしまうかもしれないほどの探究こそが目指すべき本当の探究だと思います。そこまでの問いに出会えたときに、できればすごく探究した上でそういった問いに出会ってほしいのです。先生が押し付けた見せかけの問いをいやいや探究するのではなく、夢中になって時間を忘れて、この問いは誰にも渡したくないというほどの問いに多感な時期にこそ出会ってほしい。

さらに、20歳が成人ではなく、今は18歳が見かけ上の、契約上の成人になりつつありますが、世の中が本当に18歳を大人扱いしているかといったときに、学校教育現場を含めて、いまだ彼ら彼女らのことを保護者と呼んでいますよね。2022年の1月に、デンマークのニールセン北村さんとの対談を配信させていただいたときに、デンマークの学校ではギャップイヤーがはさまるのでほとんどの生徒が、高校在学中に18歳になるということをうかがいました。そして18歳になると成人なので、学校からそれぞれのご家庭に電話をかけて「お誕生日おめ

でとうございます。18歳になられたので、今日から成人です。これからの判断は、全てご本人が決めます。だから、今日から学校は保護者の皆さんには一切の連絡をしません。知らない間に退学していたとしても、ご本人の決断ですので尊重してあげてください」と言って電話が切られることもあるそうです。

つまり18歳からは本当に大人だと、社会も学校も認めているわけです。しかし、日本の場合は18歳になりました、成人に変わりましたが、あらためて保護者と呼びますという通達を出した自治体や教育委員会もあります。それは、同時に、大学も含めて18歳の成人をしっかり大人として迎える気があるのかといったときに、社会の側にそこまでの覚悟がないということの現れですよ。そうすると探究のテーマとしても、その生徒たちが自分で決めたこと、その生徒たちが主体的に出会ったものを、一人の大人が自力で見つけた「問い」として、きちんと認める気がないことにつながります。それは、もしかしたら大人の目からみれば、不十分だからと考えるのかもしれないです。しかしその不十分さ、未熟さも含めて、18歳でもやれる力があるのではないかと信じるべきだと思いますが、皆さんはそう覚悟をもって探究の中で生徒に向かって問いかけていますか。それが社会として本当にできているかという、まだまだ不足しているような気がしますので、探究のなかでそういった覚悟をもった接し方が実現できればいいと思います。

先ほど、大学での探究のあり方について「探究とは何かとお考えですか」また、「なぜ探究しなければならないかと問われたら、何とお答えになりますか」「問いを立てて、探究する過程で、生きていることの実感や喜びを感じられているのか」と質問くださった方が書いていらっしゃるが、登壇されたお二人だったら探究すると何が得られるのか、どのようにお答えになるのかを、普段お答えになっていることを

教えていただければと思います。賢一さんからいきましょうか。



佐藤 はい、ありがとうございます。格好付けた答えをしたいと思いながら、今、一生懸命、考えていました。探究によって何がしかの自分のオリジナルの問いが生まれることで、自分を問いの形で表現できるオプションが手に入ると私は思います。しかも、一般的に考えられている答えとは違って問いというのは、いくらでも状況に合わせて作り直して、アレンジして、問い直しができるという自由度の高さも魅力だと思います。何かについての答えは、そこにいろいろな責任とかしがらみみたいなものが付いて回って、答えをリニューアルすることはすごくエネルギーが要ると思います。

例えば、先ほどの科学的な発見も、いろいろな暫定的な、今現状、仮説として提示していることがあります。教科書に書かれていることは、それが間違いのない、決定的なことだというような受け止められ方もしてしまいます。そこを一つ一つひもとくのは大変だと思いますので、一般的にはそれでいいと思いますが、自分自身が立てた問いは、自分で磨き上げて、ときとしては違った方向に問い直して生きる、と考えると、探究というステップで、そういったものを手に入れるための取っかかりがあることを、魅力として伝えることができたかと私自身は思いました。

塩瀬 ありがとうございます。「自分を問いで

表現して」、格好いいことを言いましたね。

佐藤 頑張りました。

塩瀬 頑張りましたか。次に、さとさん、お願いします。

藤原 どれほど小さい子どもであっても、探究してしまうものだと思います。遊びを開発したり、なんでもいいと思いますが。それこそ、ティッシュペーパーを引っ張っている子どもも探究しているわけです。これは何だろうといって、口に指を入れている子どもも、ずっと探究していると思います。教室にいる子どもも、授業に集中してなくて外をぼーっと見ている子どもも何か考えているかもしれません。当然その子も探究しているわけです。探究の輪は、小さくくるくるしていても OK。非常にネガティブに、どつぼにはまるような探究をしている子どももいます。泥棒で、あの家にどうやって入ってみようとか、原子力爆弾を開発することも、兵器の開発も探究になってしまいます。

結局、探究といってもいろいろあります。あまり哲学者の名前を語りたくないですが、アリストテレスが言っているのは、人間が善きことをしているときに幸福になれるようになるべきだと言います。つまり戦争のことを探究しても、人は好奇心でいっぱいかもしれませんが「善き」ことではないでしょう。そうではなく、善いことに向けて探究をしていく、しかもいろいろな人たちと一緒に協働しながらやっていく。そのことによって、社会がいい方向に向かっていける、それに参画していると思えるような人生はハッピーなのではないかと思います。

塩瀬 はい、ありがとうございます。

冒頭の質問の中に「問い続ける幼稚園児を育てるにはどうしたらいいですか」という質問がありました。先ほど、さとさんがおっしゃった

ように、もともと子どもはずっと問い続けていますよね。子どもが問い続けられないように止めている誰かがどこかにいると思ったならば、むしろ逆にこのまま放っておいたほうが、子どもはむしろずっと問い続けられる気がします。先ほどもさとさんがおっしゃったように、本来は子どもたちは「探究してしまう」わけですよね。それをしないようにしているのは誰か、何かというのがすごく気になりましたので、問い続けようとしているはずの子どもたちを止めない、それを許すだけでご質問のような問い続ける幼稚園児は世に出てきそうな気がします。

僕自身は「探究は何のために？」と聞かれたら、何と答えるようにしているかという、先ほど、話していた、探究学科を20年やっている高校の生徒さんから集めた探究冊子の例を紹介しています。その冊子の中に、高校生自身が、「僕たち、私たちが探究を通じて得た、気付いたこと」をリストに挙げていました。その中になんと書いてあるかという、「分からないことに向き合い続ける」「分からないことへの畏敬の念をもつこと」というのがあります。これは、探究をする上ではすごく大事だと思っていますので、いろいろな学校でも紹介するようにしています。

学校は、基本、分からないことを減らそうとする授業がつくられていますよね。90点なら残り10点をなくす、70点なら残り30点をなんとかしてなくして、100点を目標にすることばかりを目指している。たしかに、いままでの学校では、分からないことはなくなったほうが良いし、褒められる時間も長くなると思います。その中において、探究の時間が学校に持ち込まれたのは、「分からないことの面白さ」に気付くことだし、「分からないことがそばにあっても、別にあなたを襲うわけではありません」ということを知ることだと思います。「分からないこと」や「不可解なこと」、「不思議なこと」に対して、安心してそばに自分自身を置いてお

けることを知ることこそが本当の探究だと思っています。その探究の時間に「早く仮説を出しなさい」「早く実験結果を出しなさい」「早く報告しなさい」と急き立ててしまうと、そういった精神の安寧が得られない。そうすると、せっかく分からないことや不思議なことと向き合っているのに、まるでそれが嫌な時間かのように貶めてしまうのはすごくもったいない。分からないことを楽しそうに「全然分からないですよ」と言ってくる子どもがいっぱいいることが探究授業として大事だなと思っているので、そういった時間が教室のなかに溢ればいいなと思います。

今、1時間10分で、残り30分を切ったところです。次はどうしましょうか。次は登壇いただいているお二人から会場の皆さんに問いかけてみましょうか。では、皆さんに向かって「何を問いたいか」を二人で相談していただきます。その間に、フロアは、今日、この鼎談を聞いて、帰ってから、月曜日に職場の同僚に「探究とは」「問いとは」といったときに何と語りますかという宿題をお渡ししたいと思います。まず2分間、それぞれお一人で考えてみて、その後、お近くのグループで話し合ってください。まず2分間、月曜日に「このコンソーシアム京都で聞いた問いや探究は、あなたが思っていることと違うんだぞ」と話し始めてから、詳細をどのように説明するかについて考えてください。2分後に、またお声かけをします。その間に、登壇のお二人は、皆さんに何を尋ねるかを考えてください。

<話し合い>

塩瀬 ではおひとりずつお考えくださったころだと思うので、フロアの皆さん同士で、月曜日に帰ったら「探究とは、こんなものだぞ」「問いとは、こんなものだぞ」というのを、どんなふうに話しかを、先ほど、一緒にお話ししたグループで5分間、お話ししてください。寂しそうにしている方がいたら、声をかけてあげてく

ださい。どうぞ、お願いします。

<話し合い>

塩瀬 そこまでにします。

一応、5分過ぎて、そのまま流してロスタイムを取っていましたが、Slidoに「そろそろ終わりにしたらどうでしょうか」と書いてありました。その班は、もうしゃべることがなくなったのだらうと思ったので、その声を尊重しまして、5分たっていませんがここで議論時間をやめます。ボリューム的には、まだ熱を持ってしゃべっていたところがあると思いますが、これに従って終わりにしたいと思います。

まず Slido の新しく挙がっているものについて答えていこうと思います。「大学での探究の成果は、ポスター発表と論文だけですよね」

「High Tech High は違いますよね」。そうですね、ハイテクハイでは3Dプリンターでモノを実際につくるようなアウトプットもあります。僕も博物館の授業では、展示そのものをつくってもらったりもします。学生さん自身に、自分が考えていることを展示という形にしてもらっています。先ほど、さとさんの話の中にデューイの探究の話がありましたけれども、デューイの理想の学校のモデルの中に、1階のど真ん中に博物館があって、2階のど真ん中には図書館があるという、博物館と図書館を真ん中にした学校のプランがありました。これは、分からないことや探究に向き合うための資料がたくさん集まった拠点をいつも目にすることができます。答えのあることに向き合う時間が多い教室とは別に、答えのない学びに関わりの深い博物館や図書館が学校の真ん中にあることは大変良いことだと思います。そういう場所の表現方法の1つとして、昔の師範学校をルーツにもつ学校にはショーケースがある学校も多いので、そういうものをもっと復活すれば良いと思います。最近であれば、アゴラスペースとかラーニングコモンズなど、集まる機能に特化させた場所もいっぱいありますよね。そういうと

ころを有効に使えばいい。

「会場の参加者に問いたい問いを教えてください」これは、まさに登壇者のお二人に考えていただいたので、これから投げてくださいと思います。それから、「高大連携、産学連携に望ましいあり方、具体的な進め方」という質問に関して言うと、ここもよく相談を受けますが、産学連携で企業とコラボして、企業にお題を出してもらうのはやめたほうがいいと思います。それはなぜかという、問いを教わるという前提から始まってしまうからです。高大連携で大学の人に来てもらったときにも、大学の先生は高尚な問いをたくさん持っているという設定でお声がけされてしまうので、その自分ではない誰かが考えた問いを「教わろう」という受け身の探究が大前提となってしまう。佐藤先生、この点について何か言いたいことがありますので、どうぞお願いします。

佐藤 そこに乗っかりたいです。つい最近、灘高等学校というところで、けいはんなアイデアソンというイベントがありました。まさにおっしゃるような産学連携で、大学の研究者の方もそこに参加して、生徒さんにお題を出して取り組むイベントに行ってきました。そこでも裏方の中で同じような話がありました。問いを提示する前に、その問いそのものについて生徒に考えてもらうほうがより面白いのではないかと思います。

塩瀬 本当に、そう思います、

佐藤 だから、課題の前提みたいなインプットはしますが、こちらから問いを出すのではなくて、問いからつくってもらうアプローチが面白そうだということで、去年、今年とやっています。

塩瀬 素晴らしいですね。そういう意味でいう

と、産学連携でどこかの企業さんをお願いすることもあるかと思いますが、最初に連携をお願いしたときに頼んだ先生と探究の授業を実際にその日にやっている先生が異なる場合は要注意です。この会社は何の理由で学校に来ているのだろうというのが分からないまま、担当者もただ言われてその高校に行くだけではもったいないです。呼ばれた企業の担当者も「おまえが行け」と言われただけで来ることも少なくないので、「なぜ、ここに来ているのだろう」と自問しながら教壇にたってしまいます。「うちの会社は、こんなことで困っています」と言うと、生徒からすると「なんで、それを生徒のぼくたちに聞くんだろうな」というように、話す側も聞く側もどちらもよく分からない状態のまま淡々と授業が進むわけです。しかし、契約してしまったし、来てもらっているのもったいないので、さあ生徒の皆さんが考えてみましょう、ということで授業が始まります。他人事から始まった課題に生徒たちがモチベーションを持って取り組めるはずがないですよ。会社に向かって「なんで、そんなことを調べているのですか」「なんで、その製品を売っているのですか」と聞いてもらったほうがましな気がします。

産学連携にしても、高大連携にしても、問いを授かるのかもらうという考え方は、まず捨てたほうがいいです。生徒さんの中に必ず自分自身が気になる問いがあるはずですので、その存在をまずは信じてもらいたい。多分、問いを生み出す根拠となる場所がずれている気がします。その上で、大学の先生は長年探究し続けてきた大先輩ですし、企業の人も自分たちの商品やサービスをつくる上で必死に探究してきたはずですので、課題解決手法をたくさん持っています。大学や企業から持ち込まれる問いを授かるのではなく、生徒たちが思い付いた問いに対して「この会社だったら、もしかしたら自分の思っていることが実現できるかもしれない」

というふうに連携するような考え方も取り入れたほうがいい。

「生徒に問いを立てさせる場面で、失敗だと思われる指標はありますか」まさに、産学連携の会社の数や名前を並べているのは、指標選定の失敗ではないかという気がします。せっかく連携したのに、今さら断れないというところから入るわけです。断らなくても位置付けを変えてみるだけでもよいかも知れません。それを踏まえまして、登壇のお二人から会場の参加者に問いたい問いをお伝えしていただきたいと思います。それについて、今度は答える側として皆さんは Slido に書き込みをお願いしたいと思います。1回、質問はやめて、お二人から尋ねられたことについて、今度は皆さんが思うことを書き込んでください。賢一さんからお願いします。

佐藤 このように問いを尋ねる機会があって、うれしいです。皆さん方が、今、心の中やどこかの引き出しにしまわれている好きな問い、無理して秘密の問いは出さなくていいですし、もちろん、誰にも知られたくない問いは出さなくても良いですが、気に入っている問い、ご自身のオリジナルの問いで「あれがすごかったよな」という問いでもいいですし、ドラマや映画、小説を見て「これは、しびれる問いだな」という体験をお持ちなのではないかと思いますので、1個でいいから皆さん出していただけるとうれしいです。よろしくお願いします。



塩瀬 では、Slido に書き込みをお願いします。本当に隠したいことは書く必要はないので、言える範囲内でお願いします。皆さんが書き込んでいるあいだにですが、ちなみに、お二人が、今、気に入っている問いは何ですか。それ以上に、フロアのほうが早いですね。「人の存在意義」「多様性とは何か」「なぜ生まれてきたのか」「問いに感情移入していません」冷静に向き合っていますね。「人を動かすという行為は可能なのか」「貧困の輪廻を裁ち切るには」「宇宙の果ての外側はどうなっている」「男女の間に友情は成立するのか」これは、何かあったのですかね。「歴史とは何か」「幸せとは何か」「死んじゃいけないんですか」。これも大事ですね。「なぜ勉強するのか」「なぜ歴史、戦争は繰り返されるのか」「われわれはどこから来て、どこへ行くのか」「自己とは何ぞや」「歴史は、なぜ学ぶ必要がありますか」「どうすれば投票率が上がるのか」これは、選挙管理委員会からですかね。「ライトノベルのタイトルが年々長くなるのはなぜでしょうか」確かに、長いですよ。ね。「なぜ学び続けるのか」「憧れの人は何を考えているのか」「自由に生きるとはどうすることか」「結婚とは幸せなのか」これも何か問題があるのですかね。誰かに、ちょっと相談してみてください。「建築に何が可能か」「学校における平等とは何か」「文学を教室で読む意味は」「オタクの効果」「あの人を振り向かせるには」「頑張ってください」「顔は誰のためか」「人の幸せって何でしょうか」「座標と実数は本当に対応するのか」。難しいことを言っていますね。「人を殺すとはどういうことか」「なぜ、うちのむっちゃんはこんなにかわいいのか」。知らないです。いいですね、このようなことが問えるというのはいい環境です。今、この Slido がいい場所になりつつあるってわけですよ。ね。「それは本当にやりたかったことですか」「高校における文理選択は必要か」「生きているか」「歴史とは何ぞや」「子どもは、なぜ親の言う

ことを聞かないのか」「自分は役立っているか」「人はなぜ空を見上げるのか」「働き方改革とは」「そこに愛はあるのか」。これは、ちょっと言い方が違いますよね。「そこに愛はあるんか」ですよね。

さとさんは探究を「たんきゅう(冒頭の『た』にアクセント)」と言いますよね。あれは、マックとマクドの違いみたいなものかなと思うんですけども。僕は関西なので「たんきゅう(後ろの『きゅう』をのばして発音)」と言います。皆さんは、どちら派ですか。「(た)んきゅう」の人は、手を挙げてください。「たん(きゅう)」の人は、手を挙げてください。さとさんの発音はアウエーですね。関東へ行ったら、「(た)んきゅう」の人がいっぱいいるのかもしれないですが。会場の皆さんも、関西から関東へ行くときは気を付けてください。

「生きる理由」「人の欲望には、なぜ限りがないのか」「なぜかつこの中の掛け算、割り算を先に計算するのか」。小学校の問題ですよ。あと10分ですね。「自由とは」「他人のことを理解する必要はあるのか」「なぜより良く生きなければならないのか」「日本における理想的な教育とは」「大学の真の存在意義とは」「人はどこまで行くのか」「無とは何か」「あなたは、何者かになれましたか、なれそうですか」「民主主義は無力ですか」「寄附やボランティアは善か偽善か」「生み出すということ」「世の中の親は9割毒親というのは本当か」「本当の多様性とは何か」「なぜつくるのか」「生徒が自走するには、どうすれば良いか」「なぜフェミニズムは迫害されるのか」「自由はどこまで許されるのか」「学校は公平であるべきか」「生まれ変わることはできるのか」「なぜ対話が生まれなのか」「表現とは」「どうすれば日本の人が多文化に本当に向き合えるのか」「日本語に主語は、なぜ多いのか」「言語は、どのように発生したのか」「塩瀬先生が面白い」どこかへ行ってしまうましたが、もう一度読みたいから読み

ますね。「先生の本が面白いのはなぜか」「なぜ教員を増やしてくれないのか」。これは、教育委員会に向けていますか。「赤ちゃんは、なぜかわいいのか」「息子は何歳まではおずりさせてくれるのか」。これは、大事な課題ですよ。

「自分の子どもは、なぜ思いどおりにならないのか」「受験は必要か」「娘からの問いで、なぜ影が生まれるのか」。これは、すごく難しいです。「幸せな人生でしたか」「人は、なぜ働くのか」「高校生をわくわくさせるためには」「見せかけの探究と総探の探究は、なぜ発音が違うのか」。違うのですか。探究の「たんきゅう」と総探の「たんきゅう」、総合的な探究の学習。関西弁の発音をするとなくなります。「ペットとどうすれば話せるか」「スイカ割りなぜあるのか」「君たちはどう生きるか」「なぜ年寄りを大事にしないといけないのか」「愛とは何か」「なぜディズニーにひかれるのか」「うおーっと叫ぶ声は、どう伝わっているか」。これは面白いですね。「探究はサンキュー」「無関心は駄目ですか」「私は人生の問いに答えを出せたか」「京都市の財政を健全化するには」「じゃんけんの掛け声」。読み切りました。

この中にあるものはどれもすごく面白そうですし、深めることができそうなものがたくさんあると思います。それが言えた環境を、皆さんは教室でできているかどうかですよ。それぞれの生徒さんも、多分、これと同じようなことをたくさん考えていますが、それが出せるような場をつくられているかどうかです。「それは、どう思いますか」と言われたときに、聞くことは難しいですよ。「先生の探究とサンキューは似ています」と静寂に包まれた教室で手を挙げて発表させるのは難しいと思いますので、それが言いやすい状況がつくられているかが大切です。もし、そのためにICTが使えるのであれば、それを使っていきたいだと思います。とにかく、そもそも皆の中に問いがそもそもあるということがすごく大事な気はしますので、

その問いが自然に引き出せるような場所、問える場所に学校がなっているかどうかが大事だと思います。

会場から聞かれていた質問の中に、「お二人が、今、思っている問いに向き合う、研究からなぜそこに至ったのか」という質問について聞きたいです。賢一さん、さとさん、思うところがあれば、今、そこに至った過程も含めて、どういう研究と結び付いているのかをお願いします。

佐藤 私は学生のとときに生物学の学部・学科にいて、本当に人生の大半は生物学に関わってきました。中学校までは理科はそんなに興味・関心の対象ではなかったのに、高校のとときに、たまたま担任の先生が生物の先生で、身近に接した先輩が生物学をととても好きだったということで、高校1年のとときに初めてDNAとか遺伝子という言葉に出会いました。私が高校生のとときは、1980年になってすぐくらいです。その頃はDNAや遺伝子が出始めて、まだ教科書にはきちんと載っている状況ではなかったと思います。ただ、その話にすごく魅了されました。私は、何か得体のしれない、しかし大変魅力的に感じたDNAとか遺伝子という言葉に引かれて大学に入りました。ただ憧れが強いだけで入ってしまいましたが、研究室に入って、研究というのはこういうものだということを先輩や先生からしごかれる中で問いをつくってきたという、そういうタイプです。

もともと幼少期からそのようなものに触れて、問いを立てて、磨いてきたとはとても言えない来歴を持っています。そこから思うのは、好きなこととか、憧れとか、まねしたいことが探究の種なのかなと自分なりに総括しています。以上です。

塩瀬 すみません、詳しく見ると、それぞれの経験において深められた点だったので、問いへ

のつながりだけではなくて、研究の中で深めたという点があれば、さらに付け足していただけたらと思います。

佐藤 はい、ありがとうございます。そうですね。やはり、問いの解像度でしょうかね。その問いが何を尋ねているのかに向き合うトレーニングを、中学、高校、大学とした記憶がなくて、仕事で研究開発みたいなことに取り組む中で、自分が尋ねていることというのは、他者から見てどう見えるのかということも含めて、問いの解像度を上げることを学んできた気がします。なぜ生きた自分の体、しっかり生きた状態のままで頑張ってくれているのかということが、私が知りたいことの1つですが、そのような問いはあまりにも抽象的過ぎて、実験的に検証するとか、誰かに尋ねて答えを手に入れるには解像度が粗過ぎて「あなたは、何を聞いているの」みたいな話になってしまうことが、いろいろな文脈でたびたび経験しました。

何が自分の問いの焦点になっているのかということは、言語表現を中心に解像度を上げていく必要があって、そこに主語が何なのか、どのような背景なのか、どの程度の時間的なスパンを想定した問いなのかが必要です。結局は、何を尋ねているかが見える化できるか、できないか、問いについて考えることで深く接することができるようになったのが実感です。

だから、今の若い人たちは、高校・中学の段階からそのような取り組みをトレーニングするチャンスがめぐってきているというふうに、私は受け止めたと思っています。先輩面はしたいのですが、一緒に頑張っていけたらいいなぐらいの、そのような気持ちです。以上です。

塩瀬 はい、ありがとうございます。よろしければ、さとさんのほうからもお願いします。

藤原 探究の研究ですか。

塩瀬 そちらでいいと思います。探究の研究です。

藤原 探究の研究ですか。そうですね。何だろうな、探究ですか。私自身も探究が何か、知ったようなことを本には書いていますが、これが探究だというのは、日々すごくぶれたり、新しく質問を頂いたりすると戻ったりしたりすることがすごくあります。だから、次にまた本を書いたときに全然違うことを書いていたら、本当に申し訳ないと思います。私の中でも探究という概念は常に育ち続けているし、更新されているので、1年前と今は、よく言えば育っているし、ほかの方を不安にさせてしまうかもしれないですが、変わっている部分もあります。

こういう形でお話しさせていただいて、まさに問いを投げかけられることは、私にとってはすごく重要です。「そんなことを言ったって、現場では」と言われると、私はまた考えます。そのようなことの繰り返しによって、探究の概念が育つとしか言いようがないのですが、そのようなこと自体が非常に、幸せと言っていいのか分からないのですが、まだまだ尽きないという感じです。しばらくは全然平気でこのことについて考え続けられる、そのような感じがあるかなと思います。

塩瀬 はい、ありがとうございます。というところで、肝心の終了時間になりましたので、これで鼎談を終わりたいと思います。今回、このタイトル「どうすれば良い問いをデザインできるか」なのですが、お二人も含めて、良い問いをつくろうとは一切していなくて、この場そのものだと思いますが、今回、皆さんから234個の書き込みを頂いています。教室の中で生徒に234個の発言をさせようと思うと結構大変ですよ。これがたくさん出てくること自体が、問いづくりにすごく大切だと思います。一つ一つの問いを出す敷居をいかに下げて、皆で1回、

問うてみるかです。それは自分の中にどんな問いがあるかを知る手段でもあるし、教室の中でみんながどんな問いを持っているかをお互いに知る手段でもあるので、とにかく問うことの敷居をまずは下げていただくことです。結果として問いが多く出れば、勝手に解像度が上がり始めますので、それが今回の鼎談という形で、皆さんの前でさせていただいた問いとの出会い方の1つだというふうに、皆さんの選択肢になればありがたいと思います。

「この場をファシリテーションするのに、事前に決めてきたことと、場を見て考えたことは何かを教えてほしいです」と問われました。先ほどの1行のものもそうですけれども、「皆さんが気軽に問えること」と、「質より量を目指すこと」の二つです。事前に登壇者のお二人にお願いしたことは、とにかく会場からの質問に対しては素早く打ち返してください、ということしか伝えていません。打ち合わせとしては、それ以外は何もしていません。私は、普段、こういった鼎談やパネルの事前打ち合わせをしません。皆さまは、丁寧に授業準備をされていると思いますが、そのときと全く同じ心づもりで探究授業に臨んでしまうから全部決めてしまうのだと思いますので、できれば、1回、全く決めないまま探究の授業に乗り出して、どうしようと、どきどきしながら生徒たちの前に立ってみていただけたらと思っているよりも「良い探究の授業」ができる気がしますので、そんなことを信じてもいいよというきっかけの時間にこの鼎談がなればいいと思います。

皆さん、お付き合いしていただきまして、ありがとうございます。登壇してくださったお二人に拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。